

# 「未来をになう長浜っ子」育成プロジェクト 第1回懇話会 議事要点録

I 日 時 令和元年7月31日(水) 10時00分～12時00分

II 場 所 長浜市役所本庁舎5階 教育委員会室

III 出席者 川瀬 寛子 委員 桐山 恵行 委員 嶋田 一葉 委員  
東溪 佳代 委員 中山 郁英 委員 松井 善典 委員  
板山 英信 教育長

【事務局】米田教育部長、横尾次長、伊藤課長、成田課長代理、河瀬副参事、  
長屋主幹、城楽学力向上推進員

## IV 内 容

### 1 開会

事務局 開会を宣言

### 2 教育長あいさつ

教育長 ○ このプロジェクトを立ち上げたのは二つの理由がある。1つは、学力向上ということ。学力とは「生きる力」とか、自ら問題を考え、解決していく力と言い換えることはできるが、そうした力が身につけているかどうかをどこで判断するのか。また、文科省の学力学習状況調査の結果はどうか、それを向上させていくにはどうすればよいのか。そうしたことを具体的に考えていくというのがきっかけの1つである。

○ さらに、ICT機器がどんどん入っていく中で、学習の個別化、個に応じた指導をどう行っていくか、そういう学習スタイルをつくっていかないと乗り遅れてしまうのではないかという思いを強くしており、本プロジェクトを通して幅広い意見を伺いたいと考えている。

○ 本プロジェクトにはワーキンググループというのがあるが、原則、校長先生方に推薦していただいた20、30代の先生方に集ってもらって熱心に議論をしてもらっている。ただ、抽象的な話にならないように、できるだけ具体策を考えていただきたいと思っている。その具体策を今日お集まりの皆さんに見ていただいて徹底的に議論していただきたいと思う。

○ こういった懇話会には、進行スケジュールが決まっているが、それにこだわらず、若い先生方と皆さんの間で徹底的に議論していただきたいと思っている。必要ならワーキンググループの先生とも意見を交換していただければと考えている。また、2学期以降、ご要望があれば、直接学校での授業の実際もご覧いただく機会も設けたいと思う。どうか、率直なご意見をお聞かせいただきたい。

### 3 委員紹介

事務局 各委員および事務局から自己紹介

### 4 座長・副座長の選出

事務局 座長および副座長は委員間の互選により選任することを説明  
→ 座長に桐山委員、副座長に川瀬委員が選任された。

## 5 議事

### (1) 会議の公開等について

事務局 参考資料2に基づき会議の公開について説明  
→ 異議なく公開として決定された。

### (2) 懇話会の開催趣旨等について

事務局 資料2、資料3、資料4、資料5により懇話会の開催趣旨、懇話会の役割と今後のスケジュール、ワーキング会議の進捗状況について説明

委員 ○ 学力向上に重点が置かれているように思うが、学力の定義をどう捉えているのか。

事務局 ○ テスト等で測る狭い意味の学力ではなくて、問題発見や解決、将来を生き抜く力など広い意味での学力と考えている。

委員 ○ 要望があれば学校訪問もと言われたが、具体的な時期は決まっているのか。

事務局 ○ 2学期以降、皆さんや学校の都合などを聞きながら調整する。

### (3) 意見交換

事務局 参考資料4、参考資料5をもとに長浜市の子ども達の現状、本市の主な教育施策、新学習指導要領のポイントについて話題提供  
参考資料6に基づき、欠席委員からの意見を代読

座長 ○ 事務局の説明もあったが、それにとらわれることなく、皆様が日頃から考えておられること、活動されておられること等をもとに皆さんのご意見をいただければと思う。

委員 ○ 教育となると目標が必要になるが、成果を測定するのは難しい。ただある程度目標があったほうがいい。抽象的には描けるわけだが、切実なのは「働けるかどうか」みたいなこと。生活をしていく力とか、地域で何か役割を持って能力を発揮されるというところが1つの大事な目標になるのではないかなと思う。ハイクラスなトップを育てると言う目標もあるが、その地域で人生を過ごせる、生活を営めるという、そういった学力というのも目標にしたいかなと思う。

委員 ○ 目標の設定のしかたについて、地産地消という言葉があるが、ある友人が「地学地働」、地域で生まれ地域で学び地域で働く、ということを主張している。親は子どもが都会に出てサラリーマンになった方が経済的にも楽だということも考えるが、地域に残らなければ意味がないので、いかに子どもが地域に残りたいかという教育も大事なのかなと思う。

委員 ○ このプロジェクトの学力というのは、大学進学に直接関わるような学力をいうのか、それ以外の話を重点に置くのかというのは結構大切な視点になると思う。極論をいうなら学力という言葉を使わない方がいいのではないかな。学力という言葉が人によって定義やイメージが違うし、どうしても5教科とか7教科とかの学力のイメージが強い。そうでなくて、もっと幅広い意味で生きる力とか、「みらプロ」の通信にあったような力が大切なんだと伝えていくのなら、学力という言葉は使わない方が伝わりやすいのではないかなと思う。

委員 ○ 学力とは言わずに、経験から学ぶ力ではどうか。畑を作る山に登るという多様な経験から何を学び取るかが学力でもある。

委員 ○ さきほど長浜市の子ども達の現状について話があったが、私が教育委員をさせていただいていた6、7年前と全く一緒に、学力学習状況調査も全国で最

低レベルだ。学力とはそれだけではないというのは一種の逃げのように思える。実態があまりにも低すぎてこれでいいのかな、少なくとも全国平均ぐらいの学力って必要なのではないのかなと思う。いわゆる狭義の学力ということ個人としては思うのだが、きれいごとばかりに走ってきたのが今までの長浜市の教育なのではないかなと思うのだが。

テストの結果等を公表しないのは、点数ばかりに目が行くからだと思うが、ただ客観的に把握しておく必要はあるのではないかな。生徒がこれだけ伸びたということで先生のやる気にもつながると思う。

委員 ○ 今やっていることがいつ測定できるか、彼らが人生を振り返ったときにどうかというのが最終的なアウトカム。一つの評価では限界があるということ共通点として持っておいて、何で代わりに測るかということ、やはり何をやったかというプロセス評価をもっとやっていった方がいいのかなと思う。例えば模試をやったらこうなったとか、そういうことを試験的にやってもいいわけで、いろいろなことを試行錯誤して、新しいことを取り入れてやってみるなど、そういったプロセスをどんどんやっていって、これは生徒の顔がよくなったとか、3年後のテストにつながっていくとか、今つくっておられる指標をもとにそういったプロセスの評価を重視していくといいのかなと思う。いろいろな取り組みをされているとは思いますが、その取組がどうだったのかをもっと追求できればいいのではないかなと思う。

委員 ○ 学力学習状況調査について、平均で見る必要があるのかどうか。子どもどうし、学校による個差が出てくるのではないかな。子ども一人ひとりが小学校1年生から中学校3年生までどのような変化をしているか、を見ていくほうがいいのではないかな。今小学校から中学校まで子どもの学びがどのように蓄積されているのか私にはわからないところがあるが、それが、ICTなどを活用して細かく見える、そういうことのできる環境、時代になってきているのだから。

委員 ○ 0歳から2歳の子どもたちを見ていると、タブレットの映像を見せると泣き止む。1歳でも親のタブレットのパスワードを解除する。止めましょうといっても、中々止まらない。イベントをやるごとにお父さん、お母さんが動画を撮られる、そこにおじいちゃんおばあちゃんが一緒に共有して、コメントとか入れられるというアプリがある。このような環境で育っている子どもたちは果たして紙と鉛筆に戻れるのか。高3の娘は、電子辞書も使うし、紙の辞書も使う。ぎりぎりスマホで育った世代ではないが、それ以下の年齢の子どもたちは紙に親しむ機会をどうやってつくればいいのか。

委員 ○ 答えをすぐ求める子どもたち。手間がかかっても調べるということ、調べる過程があるということは全然違うと思う。できる子は、小さいころから勉強する習慣がついている。3歳から小2くらいの中に、歯磨きなどと同じで、勉強はするものと思わせてしまうことだと考え、6、7年前から少人数で教えさせていただいている。まず、インターホーンが鳴って出て行くと黙って待っている。挨拶ができない。こんにちは、靴をそろえるというところから教える。さらに、鉛筆やノートを出すのにまず時間がかかる、片付けるのにもまた時間がかかる。そこから教えてあげないと。それがスムーズにできてからの学力向上だと思う。

長浜市の学力の底上げということから話すと、まず読むことができる、次に読解力をつける課題を出していきたいと思っている。学校の先生方も精一

杯のことをしてくださっていると思う。まずは長浜の子として、幼児期から地域が関わって、理想なのだが学習習慣をつける何かができないかと思う。

委員 ○ 阿部 彩という方の「子どもの貧困」という本では、教育も連鎖するという。今の子どもの底上げも大事だが、保護者自体も地域とかで、学習する機会がないと、貧困も連鎖するし、学力も連鎖する。負の連鎖をとめる施策なり、取組が必要だと思う。そういった面からも、保護者、地域との連携というのは必要不可欠ではないかと思う。

委員 ○ 大人たちが目標を口にしないと、子どもたちもインスパイアされない。親の世界観が子どもの世界観になってしまうので、多方面に人材をつくることも大事ではないか。例えば、長浜から人間国宝や世界的バレリーナを輩出すれば、その人たちがロールモデルとなって、それこそよい教育の連鎖が起こるので、就労や生活のためのベーシックなインフラとしての教育と個性や可能性を伸ばす教育の両方が必要だと思う。

日本の人材がどんどん外に出て行くとなると、日本の学力とはどう定義していくか、問題解決といっている間はジリ貧だと思う。問題解決というのはAI、ロボットで何でもできる。大事なものは、イノベーションできる力、自分で問題を作る力、自分で問いを立てられる子、将来就労できる人というのは自ら地域の問いをつくってそれを商いや生業にできる人がいいのだろうなと思っている。そういうところに教育のリソースをさけることができると、社会が変わるし、自治体消滅などはなくなると思う。

委員 ○ 小4の時の先生が印象的だ。40人くらいのクラスを均等な6つのグループに分け、毎日小テストをグループで競わせる。できる子はできない子に教えてチームの成績をあげようとする。一定期間が過ぎるとグループ換えして、常にグループの学力は均等になるように。自分の基礎は小4のときにあったと思える。毎日日記を書かせるとか、今思ってもすばらしい先生だったとの思いがある。10歳の壁を越えるというのがその時期は大切。スタンダード教育というのは先生の個性的な教え方が消えてしまうのではないか。

委員 ○ 大きな文脈でいうと、当たり前の話なのだが、均質的な社会人をつくるためには集団というのがいいやり方だった。いわゆるボトムアップ型の教育、インフラとしての教育である。ただ、それだけでは時代の変化とか人口減少社会で太刀打ちできないという現状なので、ハイエンド型というか、それぞれに特化した個性を伸ばすやり方というようにしないと、伸びる子も埋もれてしまうということがある。

教室へ行けない子に対しても個別的な対応というものがある。ボトムアップとハイエンドのハイブリッドというのをめざしていけるといいし、問題を解決できる人材も大事だし、問題を設計できる人も大事、多様な人を育てていかないと地域とか社会が成り立っていかないとところでいろんな施策や挑戦をやってもらえたらと思う。

委員 ○ 2030年にはAIによって失われる仕事が半分ぐらいなくなるという。あつという間だ。子どもたちも学んでいかざるを得ない。素朴な質問なのだが、学び、あえて読書、鉛筆を使うとか、そういうものを残していく必要はないのか。

やっぱり、人間はどこまで言っても人間なので、長浜子育て憲章にあるような人間の心は10年先も100年先も変わらないはず。

委員 ○ 東京のタワーマンションに住む子が虫の生態知らないという記事を読んだ。

長浜では原体験を積める環境があるのでそういうことはやっていくほうが良いと思う。

- 委員 ○ やはり、そこは経験から学ぶ力で、田んぼを手伝った、そこで何を学んだかとか、曳山祭りに参加した経験を学ぶ力にどう変えていくのかということだと思う。自分の場合は、長浜でこういう経験を積んでいたから患者さんと田植えの話ができるといったように、後で答えあわせができた。教育の効果が後になってわかるということがあるので、今年の点数に反映するとか卒業時の人格に影響するとか短期的に見れば効果は薄いかもしれないが、長期的には人格の涵養とか社会性には影響するのかなと思う。
- 座長 ○ 時間を忘れる会議というのを久しぶりに感じた。活発な話をしていただき、また次回からの会議が楽しみになってきた。

## 6 次回開催予定について

事務局 10月23日(水)午前10時より 長浜市役所本庁舎5階5-B会議室

## 7 教育部長あいさつ

- 教育部長 ○ 話し足りず皆さんにとっては消化不良の状態ではないかと感じている。あっという間の2時間だった。
- 今まで長浜の出生数は約1000人と言ってきたが、今は900人を切り、800人台となっている。その中で、常に子どもを中心に据えて、周りには保護者がいて地域の方がいる、企業さんがいて行政がいる。そういった大人の枠がある中で、みんなができることを連携協働していくことを大事にした。
- いろいろな育ちの子がいるが、長浜で生まれてよかった、長浜で育ててもらってよかった、この思いを大事にした子どもたちが、世界で活躍する、長浜を守る、帰ってくる、それぞれの生き方ができるという子を育てたい。
- これからも意見交換をいただくわけだが、ワーキングとの意見交換であったり、現場の視察であったり、皆さんのご要望にも応えていきたい。みんなが共有できる、長浜の子どもたちをこういう風に育てて生きたいというものをつくっていきたい。

## 8 閉会